

海外では、人のH5N1AIウイルス感染において、水禽類の羽との関連が示唆されている事例があります。ガチョウに由来するバドミントンの羽を作る作業員や、死んだ白鳥の羽をむしった人の感染が報告されています。H5N1AIウイルス感染水禽類の羽は公衆衛生上の危険性を有する可能性があります。

現在のところ、水禽類の羽上皮細胞でのウイルス増殖が、H5N1AIの野外発生にどの程度関与しているのかはわかりません。しかしながら、日本では水禽類が

屋外で飼育されている地域があります。野外環境において、カモ類等の水禽類が近年流行するH5N1AIウイルスに感染した場合、呼吸器分泌物や糞便とともに、羽からのウイルス排泄の可能性について注意する必要があります。

掲載誌 Emerg Infect Dis. 2008 Jan; 14(1): 149-51.
この研究内容は動物衛生研究所ホームページでもご覧いただけます。
<http://niah.naro.affrc.go.jp/publication/seikajoho2/2007/niah07011.html>

TOPICS

平成20年度文部科学大臣表彰 創意工夫功労者賞の受賞

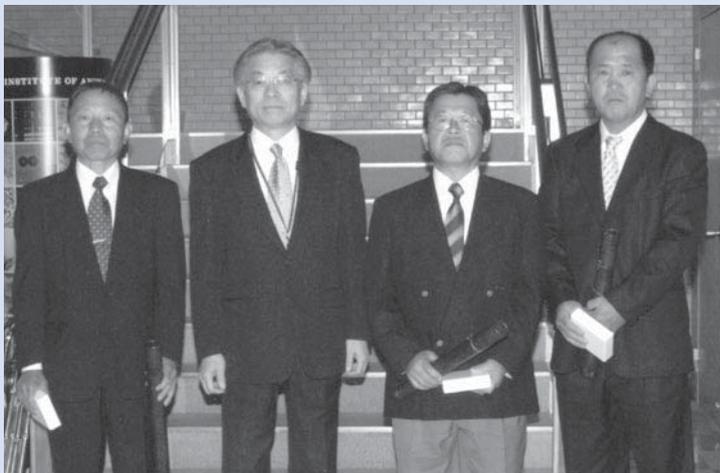
平成20年4月14日に、九州支所駐在の実験動物管理科職員である堀脇浩孝、福永義巳、栢山正弘の3氏が「微小吸血昆虫ヌカカの採集装置の改良」により、平成20年度文部科学大臣表彰 創意工夫功労者賞を受賞しました。ヌカカは、アカバネウイルスなどの牛のアルボウイルスを媒介する吸血昆虫です。体長が1～3mmと非常に小さいことから、

虫体を傷つけずかつ乾燥する前に実体顕微鏡下で行う仕分作業は、熟練を要する仕事です。これまで、ヌカカの採集は、ブラックライトと吸引ファンを用いた装置が使われてきましたが、従来の装置は大型で持ち運びが不便であることや、電源のない場所では使用できない等、採集場所が制限されていました。そこで今回、採集装置を小型化するとともに、

乾電池で稼働する装置を新たに工夫開発し、どこでも使用が可能であり、離島等での野外調査に活用できるようにしたことが受賞対象となりました。3氏は、「今後も、日常の業務に工夫を加えながら、家畜衛生研究の向上に少しでも貢献したい」と抱負を話していました。

(環境・常在疾病研究チーム

主任研究員 梁瀬 徹)



左から福永、村上所長、栢山、堀脇各氏



従来型装置（左）と新しく開発した装置（右）